
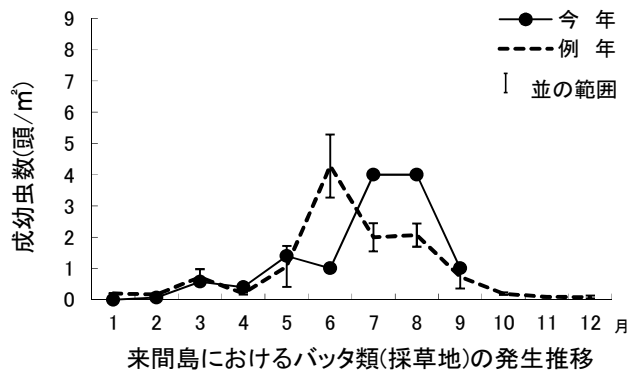


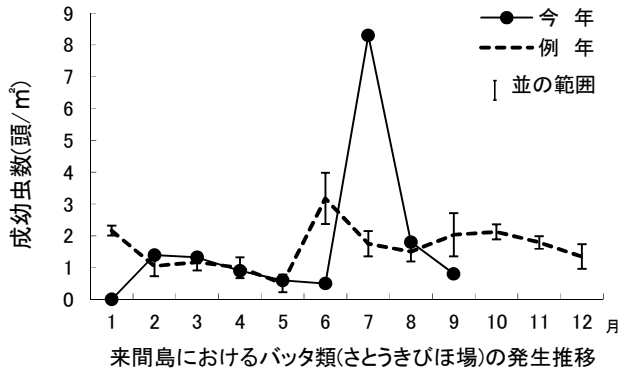
作物	さとうきび	地域	宮古群島
病害虫名	バッタ類		
9月の発生量(現況)	並		
10月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	採草地及びさとうきびほ場における成虫・幼虫数の例年の発生推移から、9月と同程度の発生量と考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)

採草地




さとうきびほ場



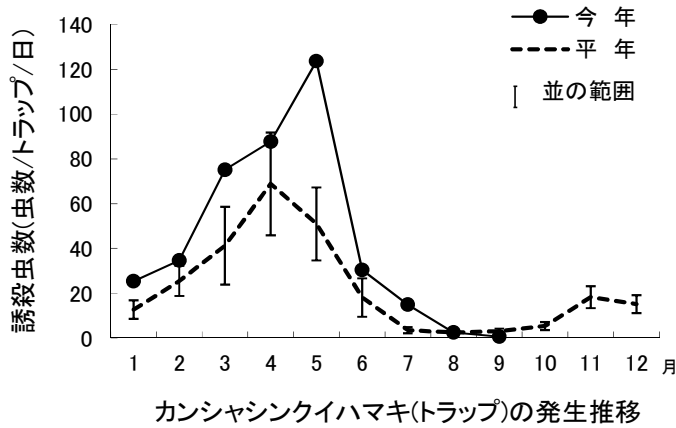
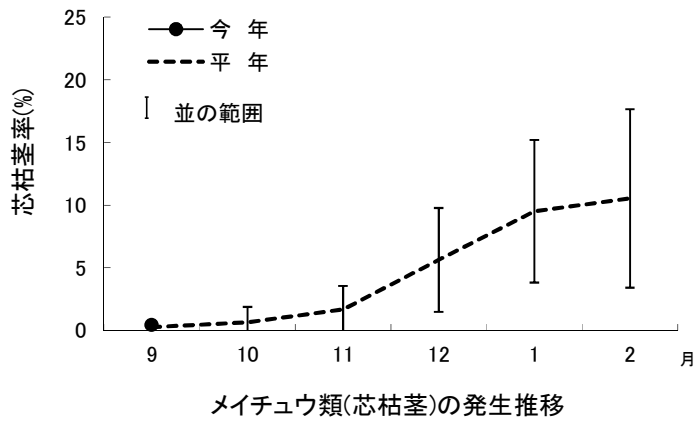
- ・ 来間島の一部地域では多発していた。(発生種：タイワンツチイナゴ)
- ・ 本調査にて幼虫、成虫が多数確認された。

防除のポイント

- ・ 発生源となるほ場及び周辺の除草を徹底する。
- ・ 成虫防除を実施する場合には、活動の鈍い早朝に一斉防除を行うと効果的である。


作物	さとうきび	地域	宮古群島
病害虫名	① メイチュウ類(カンシャシクイハマキ)		
9月の発生量(現況)	並		
10月の増減傾向	↗		
増減傾向の根拠	芯枯茎率の平年の発生推移から、9月より発生量は増加すると考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)

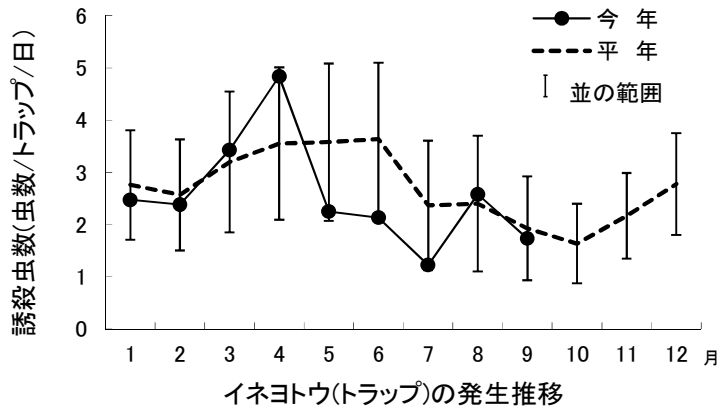
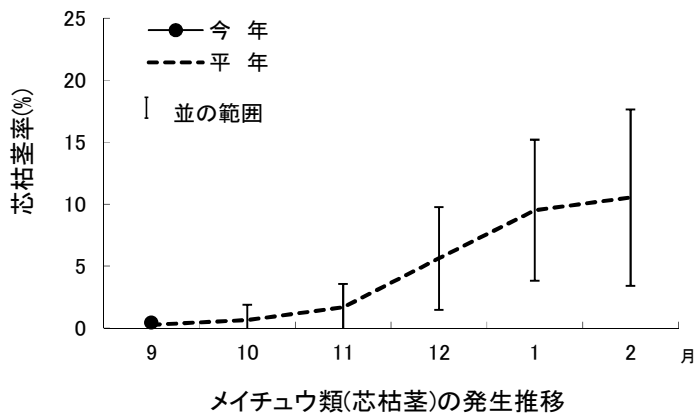


防除のポイント

- ・ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- ・加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ・ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- ・乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- ・植え付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。


作物	さとうきび	地域	宮古群島
病害虫名	② メイチュウ類(イネヨトウ)		
9月の発生量(現況)	並		
10月の増減傾向	↗		
増減傾向の根拠	芯枯茎率の平年の発生推移から、9月より発生量は増加すると考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)

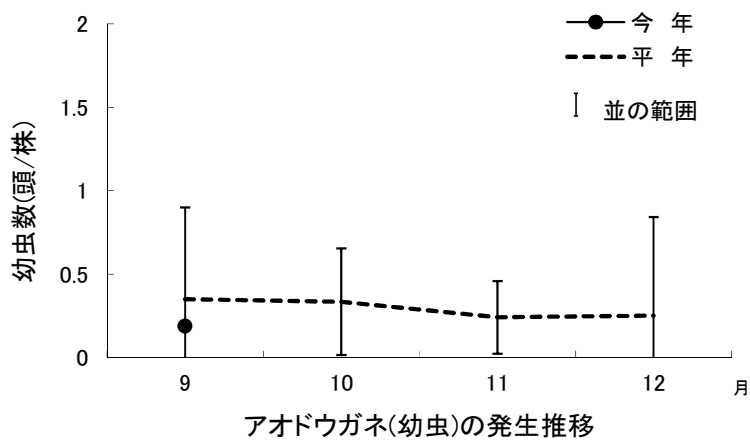


防除のポイント

- ・卵は塊で産み付けられ、ふ化した幼虫は葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- ・加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ・ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- ・乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- ・植え付け時、培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。


作物	さとうきび	地域	宮古群島
病害虫名	アオドウガネ（幼虫）		
9月の発生量（現況）	並		
10月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	幼虫数の平年の発生推移から、9月と同程度の発生量と考えられる。		

発生量の根拠（調査結果）



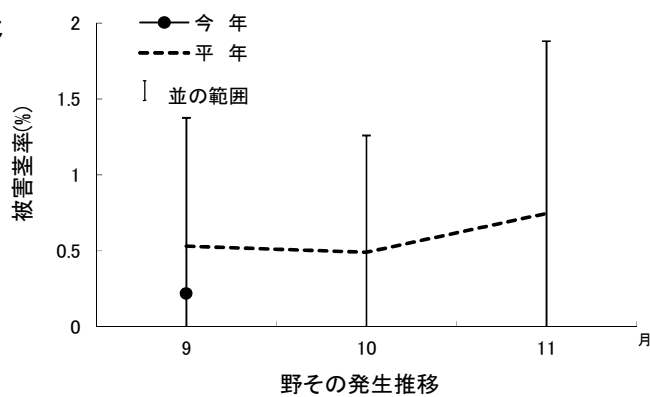
防除のポイント

- ・夏植え前にロータリー等で碎土を行う。
- ・若齢幼虫を防除するため、培土時に粒剤を処理する。

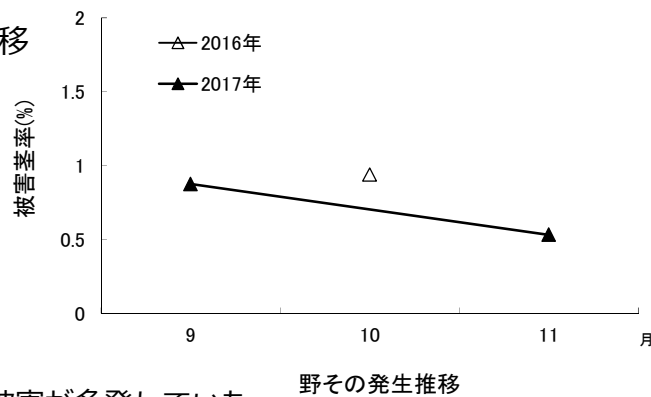
作物	さとうきび	地域	宮古群島
病害虫名	野そ		
9月の発生量(現況)	並		
10月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	被害茎率の平年の発生推移から、9月と同程度の発生量と考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)

今年と平年の推移



過去2年間の推移



・池間島で被害が多発していた

防除のポイント

- ・管理されていない耕地などで繁殖するため、ほ場周辺も含めて雑草防除等の管理作業を行う。
- ・野積みされた剥葉残さなどに巣を作るため、野積みを行わない。
- ・被害の多い地域では、薬剤による一斉防除を行う。



野そ類による茎の食害